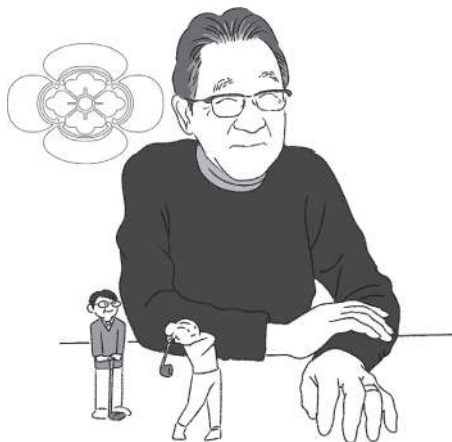


構造家・二連木清 坪井善勝門下の真骨頂

朝倉幸子◎TH-1
illustration:Taco



■ ルーツ

二連木清さんは、苗字を「にれんぎ」とお読みする。苗字のルーツは愛知県豊橋市の二連木城からきている。徳川時代から続く由緒ある苗字であり、二連木城址もある。

1952年生まれで故郷は栃木県。意匠設計事務所をしていた東京芸術大学出身の叔父や、東京電機大学を出て構造設計をしていた兄の影響があったのかもしれないが、建築の中でも構造を選んだのは「絵が上手くなかったからですかね」と話す。

日本大学へ進学し卒業して大学院は坪井研究室へと進む。「当時の日大には凄い先生がいましたネエ」と二連木さんはまるで人事のように覇志堂と共有する。今でも多くの構造家の卵が教科書とする国立代々木競技場（1964年）があるが、その建築を丹下健三とつくった構造家・坪井善勝の研究室に進んだのは凄いことである。東京大学を離れて日本大学教授として教鞭を取ったときの門下生の一人が二連木さんとなる。「研究はシェル構造が多かった……」と静かに語る品のいい門下生なのです。坪井先生からあの建築を見に行くように！などといわれたことはなく、当時は「時間がゆっくりと流れていたんですよ」と。

■ 青木研究室

卒業時は就職に厳しい時期だったので、長崎の大洋漁業関連のゼネコンに入社する。勤務地は東京だったが、第二次世界大戦の後始末をしている建設会社で、鉄骨の倉庫やアルジェリアの工場の構造設計をしたという。戦後の感覚で仕事をするには若い二連木さんは1年で転職を決めた。その後、構造家・青木繁さんの事務所に移り、丹下健三の片腕として知られる建築家・大谷幸夫さんや、建築家・大江宏さんの構造設計に携わる。大谷作品の中でも有名な沖縄コンベンションセンター（1987年）は、当初から設計に携わっていて、現場監理は別の所員が担当していたが、二連木さんも時々現場へ出向いていたという。事務所の先輩に聞いた大谷先生の逸話もあり、自ら広島ファブに出向き、鉄骨の原寸を描いて指示したという。某大手ゼネコンが元請のためその対応ができたとも……。ゆったりとした時代であったともいえる話です。大江宏さんの国立能楽堂（1983年）も印象に残る。構造を木で隠してしまう設計スタイルだが、構造設計者としては少し残念な気持ちもあったような……。坪井善勝という一流の構造家に学び、一流の建築家との仕事に奔走した8年間でした。

■ レン構造設計事務所

二連木が率いるレン構造設計事務所は、公共・民間を問わず依頼が絶えない人気の事務所。現在は、水天宮に立派な事務所を構えているが、独立時には、坪井研究室時代からの仲間である構造家・岡部善裕さん（力体工房）と「事務所をシェアしながらのスタートでした」と懐かしそうに話す。設計活動だけでなく、ログハウス協会の活動もしている。最近は、実施を含め、CLTを使った木造3階建のテーマが出ている。しかし、ログハウス自体に決定的なデータが不足していて、耐火の問題など課題は多く普及は簡単ではないという。また、修行時代に知り合った方々のお付き合いも続いていて、青木繁研究室の先輩である構造家・山辺豊彦さんとは、JSCA東京の顧問として一緒に活動している。一般的な趣味と呼べるものは「ゴルフ」しかないというが、少し年上でありながらバリバリ活動される山辺さんとのゴルフを含めたお付き合いが続く限り、若々しく構造に取り組む二連木清さんの姿を見られるのは間違いなさそうです。